

今野敏「STシリーズ」

最初は「ノベルス」に関連した話と考えていたのだが、たまたま講談社ノベルスの今野敏『ST警視庁科学特捜班』シリーズが目についたので、今回はこのシリーズに限った内容を取り上げようと考えた。

今野敏作品を読み始めたのは

私がミステリを読むことから一時離れていた期間は1990年から1998年にかけてのこと。8年ぶりに再開したときは浦島太郎状態に近かった。ミステリ界の全体の様子がわからず、誰の作品を読もうかと迷った。そんな時に会ったのが今野敏の『ST警視庁科学特捜班』だった。

2005年から始まる『隠蔽捜査』シリーズ以前の話なので、今野敏はそれほど有名ではなく、話題になっていなかった。何気なく手に取ったシリーズ一冊が想像以上に面白く、そのエンターテインメント性に驚いた。慌てて調べてみると本は他にも沢山出ていて、連続的に読み進めることができた。「何でこの作家売れないのだろうか」と不思議に思ったものだった。

「ST警視庁科学特捜班」シリーズ

今野敏作品にはチームによる捜査やチームによる主人公という設

定が多い。警察小説パターンで言うと「安積班」に通じる形である。

STの係長・キャップはキャリアの百合根友久。チームリーダーの赤城左門。医師で法医学の担当。そして第一化学担当の黒崎勇治。嗅覚が鋭く、人間ガスクロと呼ばれていて、ほんの微量の揮発物質も検出してしまふ。物理担当は結城翠。電気、機械、銃などの鑑定を行うが、特に優れているのが音、声などの音響に関する分析。黒崎と結城の二人で証人に対すると、その反応で瞬時に嘘発見器の役目をこなすことができることになる。

プロフェッショナル集団

第二化学担当は山吹才蔵。麻薬、医薬品、毒物の専門家。そして僧籍を持っていて各方面に気配りをし、チームの輪の維持に勤める。心理学担当は青山翔。心理鑑定、筆跡鑑定、プロファイリングの専門家。こういうプロフェッショナルな集団がSTなのである。意図的に名前に色が配置されていて、まるでテレビの戦

〈今野敏「STシリーズ」〉

1. ST警視庁科学特捜班
2. 毒物殺人
3. 黒いモスクワ
4. 青の調査ファイル
5. 赤の調査ファイル
6. 黄の調査ファイル
7. 緑の調査ファイル
8. 黒の調査ファイル
9. 為朝伝説殺人ファイル
10. 桃太郎伝説殺人ファイル
11. 沖ノ島伝説殺人ファイル

いずれも講談社ノベルスで、その後講談社文庫に収められた。初期の3作、間に入る「色シリーズ」、最後の「伝説シリーズ」と3つに分けられて扱われることが多い。

闘隊ヒーローのように特色づけしてあるのが特徴。

そして忘れてならないのが一般捜査との橋渡し役をこなしてくれる菊川吾郎。捜査一課所属の警部補。個性の強いSTメンバーの活動がスムーズにいくよう調整を行う。今野作品によく登場する「戸惑いながらも潤滑油」の配置である。

こうして各人が個々の煌めきを見せながら物語は展開していく。全11作品の中では「色シリーズ」の「五色」が高レベルの仕上がりで、その中でも『緑』と『赤』がよくできている。若い人にも是非読んでほしいとお薦めしたい。

STシリーズ第7作「緑の調査ファイル」 2005年の作。シリーズでは第7作に当たる。

題名のとおり『緑』がテーマで物理担当・結城翠の活躍がメインになる作品。

新東京フィルの特別講演会が冒頭の話題に。指揮は辛島秋仁でゲストのバイオリン奏者が柚木優子という話に進んでいく。ところが、その柚木のバイオリン・ストラディバリウスが偽物にすり替えられる事件が起き、その捜査にSTメンバーが駆り出されることになる。いつもながらに「呼んだ覚えがないのに、何でSTが出てくるんだ」みたいな現場でのやり取りが交わされ、何とか捜査・聴取に入れてもらう。その中で関係者の一人が密室の中で殺される事件が発生し、大きな出来事に発展していく。シリーズ中、最もミステリらしい謎の作り方で、なおかつ結末まですっきりした解決・説明がなされていく充実した一作。

この作品が素晴らしいのは、結城翠を中心にしたSTメンバーの意表をつく捜査活動が読者の興味を引き付けてくれることも大きな要素だが、音楽をめぐる「音の世界」の描き方が魅力的だからである。今野敏の一番初期の『奏者水滸伝』シリーズに出てくる演奏も同じ流れであり、作者の音楽に対する知識と熱情を感じることができる。音のわずかな違いの判定や、人には聞こえないくらいの大さの音をも拾い上げる鋭敏な結城翠の能力がストーリーに存分に活かされている。今野敏の物書きとしてのうまさ光る作品である。